普請・建築文書と町家・町並みに見る伝統の継承

—和歌山県橋本市の近代普請・建築文書の事例より—

THE SUCCESSION OF TRADITION :
CONSTRUCTION DOCUMENTS, TOWNHOUSES, AND TOWNSCAPE
—Case study of construction documents of modern townhouses, Hashimoto, Wakayama—

梅 嶋 修*, 平 山 育 男**

Osamu UMEJIMA and Ikuo HIRAYAMA

Hashimoto, Wakayama, retains 35 construction documents and 21 construction drawings of modern era. According to the materials, relations between building constructions and workers were indicated as follows; (1) Each building was constructed in approximately 1 to 1.5 years. (2) Buildings in a site were commonly built by a work group. (3) In consideration of the demand and the quality of building constructions, the number of skillful workers must have been limited in the region. Since the limited workers had continuously constructed buildings by their styles, they might have characterized the townscape and established the traditional architectural style of the town.

Keywords: Hashimoto city, Townhouses, Modern era, Construction, Document, Worker

橋本 町家 近代 普請 文書 職人

1. はじめに

和歌山県橋本市の中心市街地にあたる橋本、古佐田、東家地区の調査¹⁾においては、以下に記した大正時代から昭和時代初期に建てられた4軒7棟²⁾の建築工事に関連する文章資料35点、図面資料21点を確認した³⁾。

- ①⁴⁾ 木村家住宅 主屋/土蔵改築⁵⁾ (大正3・1914年上棟⁶⁾)
- ②-1 池永家住宅 離れ座敷 (大正9・1920年上棟)
- ③-1 稲葉家住宅 座敷/店舗改築 (大正14・1925年上棟)
- ③-2 稲葉家住宅 離れ座敷・納屋 (昭和4・1929年上棟)
- ④ 上田家住宅 中央棟 (昭和9・1934年上棟)
- ②-2 池永家住宅 主屋/貸家 (昭和11・1936年上棟)

これらの文書は購入材木の控、建築材料購入及び職人作業への勘定の明細、建築総費用と支出経過の算出、祝儀の明細といった建築工事の主たる記録項目を備えたもので、見積書、明細書、領収証、施主の日記等が含まれた。一方、図面は平面図が多く確認でき、その他に家相図、立面図等が散見された⁷⁾。

本論では、これらの資料を用い、大正時代から昭和時代初期における橋本の建築工事で職人達の関わりについて考察を行い、加えて同年代における橋本の町並みの形成過程について検討する。

図1 各住宅位置図

2. 既往の研究

建築史研究においては、史料・文献類を中心として大工に関する研究の蓄積があり⁸⁾、建築生産技術とそのシステムの解明を担ってきた。本研究に關すると考えられるものでは、近世社寺建築とその史料(棟札)を基に大工の居住地と工事場、営業圏の関係を整理した日向進、西和夫氏らの論考⁹⁾や、本研究の対象地区近隣(紀州)における近世の公権力と大工との関係を解明する渡辺洋子氏の研究¹⁰⁾等

本稿の内容の一部は、梅嶋修ほか3名：普請・建築文書にみる建築工事期間と職人達の関わり 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その40, 2005年度大会(近畿) 学術講演梗概集 F-2, 日本建築学会, pp.75-76, 2005.9として発表している。

* 関グリーンシグマ 修士(造形)

** 長岡造形大学造形学部環境デザイン学科 教授・博士(工学)

Member of Green-Sigma Co., Ltd., M. Design
Prof., Dept. of Environment Design, Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design,
Dr. Eng.

が挙げられる。しかし、これら既往研究の多くは近世以前の事例に重点が置かれ、近代の一般的な民家は比較的多数が現存しているにも拘わらず、文書類の発掘とその整理や近代における建築工事と職人の関係について、現状では未だ十分な検討が行われていない。

近代における大工の研究としては、建部恭宣氏による京・近江・丹後大工についての論考¹¹⁾、日向進氏による京都の町家大工についての論考¹²⁾が挙げられる。しかしこれらは、明治維新による社会情勢の劇的な変化、つまり近代化に直面した明治時代初期において、大工が採った建築生産活動への対応や仕事の内容等を中心に論じており、本論で目的とする様に、近代の文書類から得られた大工に関する知見を現存する建物群(町並み)の造形・景観に帰結させるものはごく僅かに限られる。

以上の点を考慮すると、本論は和歌山県橋本市という一地方都市における近代の町家と職人の研究という範疇に留まらず、建築工事を通した町並みの形成過程を大正時代から昭和時代初期の普請・建築文書¹³⁾類から紐解くといった観点を含め、意義を持つといえる。

3. 橋本の町家における外観の変遷

本論に先立ち、これまでの調査によって判明した橋本の町家(主屋)における外観の変遷を述べることにする¹⁴⁾。

近世における橋本の町家(主屋)の外観は、ツシ二階建て、外壁を大壁造とし、軒は垂木までを漆喰で(主に波型に)塗籠めるものが多い。この形式は明治時代に下限を置くことができる。

大正時代以降になると、二階に本格的な座敷を構え、建物の建ちが高くなり、格式の高い家では二階壁面を大壁造とした上で正面側に定規筋¹⁵⁾を設けるようになる。また、軒は出桁造とし、垂木までを漆喰で(主に角型に)塗籠め、一部では袖壁を設けるものも見られる。また一方では、真壁造の建物が見られるようになるが¹⁶⁾、これは主に鉄道敷設等によって新たに開発された土地へ建てられる傾向が強くなり、旧街道沿いの町家では依然、伝統的な大壁造が多い。旧街道沿いの町家で真壁造を建てる場合、その多くは離れ座敷であった。

このように、大正時代から昭和時代初期の橋本では真壁造の町家が発達した一方、街道沿いの主屋では外観の格式を求め近世までの町家を踏襲したが、江戸時代までに見られなかった定規筋、出桁造¹⁷⁾、袖壁等の形式を取り入れた結果、町家の外観は近世とはやや異なった様相を呈するに至ったといえよう。

4. 橋本における町家の建築工事期間

文書の整理として先ず、各建築工事について、文書の主要な記録(建築儀礼、金銭支払等)を表2にまとめた。これを参考に工事契約から落成(竣工)までの期間を考察した¹⁸⁾。なお、いずれの工事も庭園・外構工事を含むものとする。

1) ① 木村家住宅 主屋/土蔵改築¹⁹⁾

大正3(1914)年2月に製材所への支払記録が残るため、工事契約は大正2(1913)年末から翌3(1914)年始頃と考えられた。大正3(1914)年5月、建築現場に木材の搬入があり、建方が開始され、同年9月23、24日に主屋の上棟式が執り行われた。上棟式3日後には建築現場に瓦が搬入され、屋根工事が開始された。大正4(1915)年1月に畳屋、2月に表具屋への支払記録が残り、4月を金銭支払の下限とするため²⁰⁾、落成は同年春頃と推測した。

2) ②-1 池永家住宅 離れ座敷²¹⁾

大正9(1920)年1月に前身建物解体・整地、2月に材木店への支払記録が残るため、工事契約は大正8(1919)年末から翌(1920)年始頃と考えられた。大正9(1920)年3月に別棟の納屋が上棟し、同年4月には離れ座敷の上棟式が執り行われた。落成は『普請総費用控』(史料14)を記した大正9(1920)年10月頃と判断した²²⁾。

3) ③-1 稲葉家住宅 座敷/店舗改築²³⁾

大正14(1925)年2月3日に神社での祈禱を済ませ、26日には上棟式が執り行われた。祈禱の直後には工事が開始されたと推測でき、工事契約は大正13(1924)年末頃と考えられた。大正14(1925)年3月には屋根屋への支払いを済ませ、5月に神社への奉納を行っているため、落成は同年初夏頃と判断した²⁴⁾。

4) ③-2 稲葉家住宅 離れ座敷・納屋²⁵⁾

昭和4(1929)年9月に材木店への支払、起工式を行っているため、工事契約は同年夏頃と考えられた。同年10月には上棟式が執り行われ、11月には屋根工事が開始された。昭和5(1930)年1月を大工、4月を左官の「成功」と記す。同年4月末を支払記録の下限とし、支払先に畳屋、建具店を含むため、落成は同年春頃と判断した²⁶⁾。

5) ④ 上田家住宅 中央棟²⁷⁾

昭和8(1933)年11月に製材所、大工、左官、材木店と工事契約を結び、契約の8日後には木材の加工を始めた。翌9(1934)年始に祈禱を行い、1月末には現地作業を開始した。同年4月に中央棟の上棟式が執り行われ、間もなく屋根工事が開始された。昭和9(1934)年6月を落成式とするが、昭和10(1935)年に入っても表具、電燈、陳列等に関する金銭の支払が行われるため²⁸⁾、一連の工事は同年春頃までには完了したと考えられる。

なお、中央棟建築と共に、昭和10(1935)年6月から同年9月まで「改修費」とされる金銭支払の記録が残る。これは上田家が他に所有した旧東棟の改修工事と考えられ²⁹⁾、これを含めば昭和10(1935)年秋頃まで工事が行われたと考えられる。

6) ②-2 池永家住宅 主屋/貸家³⁰⁾

昭和10(1935)年11月に材木、左官等の見積を行っているため、12月には大工と主屋の工事契約を結んだ。昭和11(1936)年3月に主屋が上棟、同年6月には貸家の工事契約を行い、7月に上棟した。同年9月11日付の建具に関する領収証が残るため³¹⁾、一連の工事は落成は同年秋頃と判断した。

上記で考察した各建築工事の期間を表3にまとめた結果、建築規模や工事の範囲にある程度の差は認められるものの³²⁾、工事1件あたりの工事期間は1年から1年半程度であったことが明らかとなる。

5. 職人の記録

次に、文書に記される各建築工事に携わった大工と棟梁、左官と親方³³⁾を表4にまとめ、建築工事と職人達の関わりを考察した。

大工では、①、②-1に棟梁として携わった上田岩吉³⁴⁾が、これ以後名前が記されず、一方、④、②-2には上田岩吉の下で働く大工の筆頭であった平野常吉³⁵⁾が、棟梁として工事に携わっている。池永家では、②-1の棟梁は上田岩吉であるが、②-2の棟梁は平野常吉が務めている。一方、稲葉家における2件の工事(③-1、③-2)は「大寅」とされる同一棟梁が工事に携わった。

表1 文書・図面類一覧

① 木村家文書一覧

史料No.	名称	年号	寸法[mm]
1	『建築材料買入控』	大正3(1914)年2月27日 ～大正4(1915)年4月15日	326×123
2	『日工扣』	大正3(1914)年10月14日	167×118
3	『控帳』	大正3(1914)年12月7日	326×123
4	「見積書」-1	年号無し	238×168
5	「見積書」-2	年号無し	246×170
6	「見積書」-3	年号無し	242×163
7	「見積書」-4	年号無し	240×163
8	「見積書」-5	年号無し	246×170
9	「見積書」-6	年号無し	240×165
10	「見積書」-7	年号無し	239×163
11	「棟上御祝儀」	年号無し	326×123

② 池永家文書一覧

史料No.	名称	年号	寸法[mm]
12	『大正九年 普請書類在中』	大正9(1920)年	252×145
12-a	「目出度初め」	大正9(1920)年1月30日 ～6月30日	120×329
12-b	『大正九年 普請用材木控帳』	大正9(1920)年2月4日 大正9(1920)年2月29日	296×160
13	『上棟祝儀及諸費控』	大正9(1920)年4月28日	325×120
14	『普請総費用控』	大正9(1920)年10月吉日	337×122
15	「見積書」 (土塚清吉)	昭和10(1935)年11月8日	234×320
16	「決定」 (冷水材木店)	昭和10(1935)年11月25日	167×246
17	「本宅普請ノ大工 日雇請負契約」 (平野常吉)	昭和10(1935)年12月17日	244×335
18	『本宅貸家 普請上棟祝儀控』	昭和11(1936)年3月28日	340×125
19	「見積書在中」	昭和11(1936)年4月9日	242×342
20	「記」 (池田福蔵)	昭和11(1936)年8月19日 昭和12(1937)年8月19日	114×140
21	「池永様 「九月十一日支拂済」 (三宅亀五郎商店)」	昭和11(1936)年9月11日	175×254 176×176
22	「座敷、納屋、 塀等計算書」	年号無し	237×170
23	「計算書」	年号無し	244×334
24	「見積書」 (山本徳一、土塚清吉)	年号無し	233×320
25	「建具控」	年号無し	241×165
26	「池永様(見積書在中)」 (富岡)	年号無し	240×335
27	「見積書」 (堀尾良之助)	年号無し	235×160
28	「家系図」	年号無し	600×300

③ 稲葉家文書一覧

史料No.	名称	年号	寸法[mm]
29	『座敷新築日嘉恵 及ビ店舗改築費扣』	大正14(1925)年2月	237×161
30	『別座敷納家建築扣』	昭和4(1929)年9月	238×163

④ 上田家文書一覧

史料No.	名称	年号	寸法[mm]
31	『建築用金銭出入簿』	昭和8(1933)年11月3日	240×160
32	『材料買入日記』	昭和8(1933)年11月3日	160×118
33	『祝』	昭和9(1934)年3月	132×193
34	『材木控』	年号無し	240×160

① 木村家図面一覧

史料No.	名称	年号	寸法[mm]
35	「平面図」-1	年号無し	329×313
36	「平面図」-2	年号無し	240×328
37	「平面図」-3	年号無し	481×415

② 池永家図面一覧

史料No.	名称	年号	寸法[mm]
38	『地理風水分檢地 家相鑑定禊祥圖』	明治23(1890)年10月	950×660
39	「本宅平面図と 炊事場改築図面」	大正13(1924)年10月17日 昭和43(1968)年	208×301 268×372 250×365
40	「建具疊 注文書類在中」	昭和11(1936)年6月2日	335×240
41	「貸家 建築書類在中」	昭和11(1936)年6月3日	245×341
42	「旧本宅平面図」	年号無し	787×750
43	「家相図」	年号無し	774×679
44	「離れ座敷平面図」-1	年号無し	278×400
45	「離れ座敷平面図」-2	年号無し	277×402
46	「離れ座敷平面図」-3	年号無し	684×279
47	「本宅平面図」-1	年号無し	680×580
48	「庭平面図」	年号無し	338×242
49	「本宅平面図」-2	年号無し	675×555
50	「基礎伏図、 二階平面図 小屋伏図、規矩図」	年号無し	540×780
51	「主屋北側立面図」	年号無し	297×416
52	「貸家平面図」	年号無し	420×230
53	「貸長屋平面図」-1	年号無し	297×416
54	「貸長屋平面図」-2	年号無し	246×173
55	「貸長屋平面図」-3	年号無し	227×154

凡例

各史料は表紙もしくは本文の記述を参照し、年代が判明するものを古い順に並べた。
なお、年号の無いものはこの後に推測される工事工程の古いものから順に並べた。
「名称」欄：表紙に題目のあるものは『』書き、その他は便宜上、内容や頭書を書き
で記した。“在中”の語が付されるものは、封筒に納められていたもの(史
料12は封筒自体)を示す。()内は発行者を示す。
「寸法」欄：表紙(又は第1葉)を正位置に置いた際の縦横の長さで、単位はmm。

資料1
『建築材料買入控』
(史料1)資料2
『日工扣』
(史料2)資料3
『大正九年普請用
材木控帳』
(史料12-b)資料4
『上棟祝儀及諸費控』
(史料13) 写真1
① 木村家住宅
主屋/土蔵
(南東より)写真2
②-1 池永家住宅
離れ座敷
(北より)写真3
③-1 稲葉家住宅
座敷 内部
(東より) 写真4
③-2 稲葉家住宅
離れ座敷・納屋
(北東より)写真5
④ 上田家住宅
中央棟
(南西より)写真6
②-2 池永家住宅
主屋
(北西より)写真1・2・6
撮影：田村収

表2 文書の記載による各建築工事の工程

① 木村家住宅 主屋/土蔵改築

大正3(1914)年	史料No.
2月27日 平井製材所への支払	1
5月25日 木材第一号届く (建方開始)	2
9月23,24日 上棟式	1
9月27日 瓦第一号届く (屋根葺き始め)	2
大正4(1915)年	
1月31日 畳屋への支払	1
2月31日 表具屋への支払	1
4月15日 支払記録の下限 (土代・竹代)	1

②-1 池永家住宅 離れ座敷

大正9(1920)年	史料No.
1~2月 前身建物解体・整地	12-a
2月4日 第1回材木見積	12-b
2月19日 冷水材木店への支払	12-a
2月29日 第3回材木見積	12-b
3月31日 納屋上棟	12-a
4月28日 離れ座敷上棟式	13
10月 『普請総費用控』記す	14

③-1 稲葉家住宅 座敷/店舗改築

大正14(1925)年	史料No.
2月3日 神社への祈祷	29
2月21日 床柱購入	29
2月26日 上棟式	29
3月4日 屋根葺の礼支払	29
5月15日 神社奉納	29

③-2 稲葉家住宅 離れ座敷・納屋

昭和4(1929)年	史料No.
9月19日 中谷材木店への支払	30
9月28日 起工式	30
10月26日 上棟式	30
11月8日 屋根葺き始め	30
昭和5(1930)年	
1月31日 大工「成功」	30
4月上旬 左官「成功」	30
4月30日 支払記録の下限 (蔵本量店・大家建具店)	30

④ 上田家住宅 中央棟

昭和8(1933)年	史料No.
11月2日 材木購入 大工、左官工事契約	32
11月10日 チョウナ初 (木材加工開始)	31
昭和9(1934)年	
1月2日 方違祈祷	31
1月24日 現地工事開始	31
3月14日 ベランダ上棟	31
3月18日 本宅取壊し、整地	31
4月5日 上棟式	33
4月11日 屋根葺き始め	31
6月24日 落成式	33
昭和10(1935)年	
3月31日 支払記録の下限 (富岡表具店 才藤電燈工事 藤村陳列等)	31

②-2 池永家住宅 主屋/貸家

昭和10(1935)年	史料No.
11月18日 左官見積	15
11月25日 主要材木見積決定 (冷水材木店)	16
12月17日 大工と工事契約(主屋)	17
昭和11(1936)年	
3月27、28日 上棟式(主屋)	18
6月3日 貸家計画図作成	41
6月16日 大工と工事契約(貸家)	17
7月8日 上棟式(貸家)	18
8月19日 建具見積(池田福蔵)	20
9月11日 建具代領収証日付 (三宅電五郎商店)	21

資料5
『本宅貸家普請
上棟祝儀控』
(史料18) 資料9
『材料買入日記』
(史料32) 資料6
『座敷新築日嘉恵及ビ
店舗改築費扣』
(史料29) 資料7
『別座敷納家建築扣』
(史料30) 資料8
『建築用金銭出入簿』
(史料31)

表3 文書にみる町家の建築工事期間

凡例 □ は文書の記録が無い範囲で、
参考となる記録から推測した期間を示す。
□ は上田家住宅旧東棟改修工事を示す。

表4 職人達と各建築工事の関係

職種	職人名前	① 木村家 主屋/ 土蔵改築	②-1 池永家 離れ座敷	③-1 稲葉家 座敷/ 店舗改築	③-2 稲葉家 離れ座敷・ 納屋	④ 上田家 中央棟	②-2 池永家 主屋/貸家
大工	上田岩吉	◎	◎				
	平野常吉	○	○			◎	◎
	正太郎	○					
	達三	○					
	荒内栄吉	○	○				○
	水内竹松	○	○			○	○
	芳松		○				
	廣吉		○				
	大寅			◎	◎		
	山本兵蔵(三)					○	○
	杉本清松						○
	山本政雄						○
	岡田政一						○
	有川幾太郎						○
左官	堤鶴吉	◎					
	土塚清吉		◎				◎
	静夫		○				
	官寅			◎	◎		
	山本徳一(市)					◎	◎
	阪本清春						○
	堀切善次郎						○
	南政吉						○
	生地丈一						○
	泉井亀太郎						○
	泉井淳一						○
	関口光太郎						○
	望月繁一						○
	水本政信						○

凡例
「職人名前」欄：() は文書によって異なる記述を示す。
各住宅欄：◎は棟梁・親方を示す。

表5 文書にみる建築工事年表 大正元 (1912)

左官では、池永家(②-1、②-2)と稲葉家(③-1、③-2)を見る限り、同一敷地内の工事は同一親方が行ったことが明らかである³⁶⁾。

また、上田家では中央棟建築(④)と共に旧東棟の改修工事を行ったと考えられるが、この改修工事は、大工、左官共に中央棟建築と同一の棟梁・親方が担当したことが読み取れた。

ところで、棟梁・親方は各建築工事に際して、どのような活動の形態を採ったのであろうか。表4において、上田岩吉、平野常吉が棟梁を務めた①、②-1、④、②-2の大工を見ると、数名の大工が両名の棟梁を通して工事に参加していることが判明する³⁷⁾。上田家文書『祝』(史料33)によれば、同家が「上棟式当日大工左官礼」を贈った控として、大工山本兵蔵の次項に「山本弟子」とされる人物が確認でき、棟梁・親方とは別に弟子、見習等を伴った職人が工事に参加していたことが判明する³⁸⁾。左官では、池永家文書『本家貸家普請上棟祝儀控』(史料18)より、表4の阪本清春以下の職人は山本徳一、泉井亀太郎以下の職人は土塚清吉が人員を出し合って作業を行ったことが判明する。つまり、棟梁・親方は一件の建築工事を行う際、自身の配下に加え、数名の弟子を伴った別の職人³⁹⁾の協力を随時得て、集団⁴⁰⁾を組織することで工事を行ったと考えられるだろう⁴¹⁾。

以上を考慮すると、同一敷地内の各建物は同一職人集団によって工事が行われる傾向にあり⁴²⁾、上記した池永家では、同一の大工集団内において、上田岩吉から平野常吉へ棟梁交代が行われたと考えるのが妥当であろう。つまり、文書が残る木村家(①)、池永家(②-1、②-2)、上田家(④)の建築工事は棟梁が交代しているものの、質的には同一の技術水準を持った大工集団による一連の仕事と考えることが可能となる。

なお、棟梁・親方は施主との工事契約を個人名で行っているが⁴³⁾、施主から棟梁を除く職人達へ直接金銭を支払っている記録は確認できないため⁴⁴⁾、施主と職人集団に置かれた職人達の関係は直接契約ではなく、棟梁・親方を介したものであったことが窺える。但し、これらの職人集団に職種を越えた相互関係は確認できず、大正時代から昭和時代初期における橋本の建築工事は一括請負ではなく、施主が工事の種類毎に分割発注を行う形式が中心であったと考えられる。

6. 職人集団による伝統の継承

各建築の工事期間と職人の記録を時間軸に置いたものを表5にまとめた。以下、表2～5を参考に、大正時代から昭和時代初期における橋本の町並みの形成過程について検討した。

大正時代に入ってから、太平洋戦争が始まるまでの約30年間、前述したように1年から1年半の周期で工事を行えば、1つの職人集団は20棟から30棟程度の新築工事を行うことが可能である。特に平野常吉による上田家中央棟と池永家主屋/貸家の工事は時期的に前後するもので、職人集団が継続的に仕事を行っていたことを物語っている。但し、旧大和街道沿いに面する建物⁴⁵⁾を見ると、大正時代から昭和時代初期の新築件数は10棟を越える程度しか確認することはできない⁴⁶⁾。

これはつまり、良材を用いた質の高い町家を建てる高い技術を有すことのできた地元の職人集団は当該地区で推測される建築の需要と質から考えて、少なくとも今回の文書調査で明らかとなった棟梁・親方の数に加えても数える程しか存在せず⁴⁷⁾、その内の1つが上田岩吉、平野常吉を棟梁とする大工集団と考えることができよう⁴⁸⁾。

大正時代から昭和時代初期の橋本においては、同様の形式を有する特徴のある建築物が次々と建てられたが、これらを支えたのは一定の技術力を有する職人集団で、長である棟梁・親方は集団内部の人間によって継承された。そのため、棟梁・親方が変わっても、技術の内容と水準は保持され、これらの要素が結果として長い年月の経過の中、町並みにおいては、町家の伝統的な形式を形成・継承する要因として大きく働いたのであろう。

ところで、当該地区には500軒以上の家が存在し、土蔵、離れ座敷等の付属屋を含めた建物の総数はこれを大きく越えるため⁴⁹⁾、上述したような数少ない職人集団と工事期間から類推すれば、橋本の町並み全体は30年程度の期間では一新されることはないと考えるのが妥当であろう。但し、職人の技術は受け継がれつつも、橋本における真壁造の導入等、既存の職人集団による新しい形式の摂取は、建物に緩やかな変化を生じさせることとなったと見なすべきである。

このように同一職人集団が勢力を持つ地域においては、長年の間に暗黙の統一感と多様な表情を持つ町並みが作り出されたといえるだろう。

7. まとめ

以上、文書・図面類より判明した大正時代から昭和時代初期の橋本における建築工事と職人集団の関わりは以下の通りである。

- 1 大正時代から昭和時代初期の橋本では、工事1件あたりの工事期間は1年から1年半程度と考えられた。
- 2 同一敷地内の各建物は同一職人集団によって工事が行われる傾向にあった。
- 3 町並みにおける建築の需要と質を考慮した結果、地域に存在する高い技術を有した職人集団はごく僅かに限定される。

つまり、大正時代から昭和時代初期の橋本の町並みでは限られた職人集団によって、比較的類似した形式の建築が次々と建てられたのである。そして、高い技術を有する職人集団内で技術の継承が行われ、技術の内容と水準は保持された。これによって同様の形式と特徴を持った町家が建てられ続け、結果として長い年月の中、町並みにおいて、町家の伝統的な形式が形成・継承されたと推測できる。

敷衍して考えれば、全国の歴史的町並みにおいても、地域には限られた職人集団が存在し、彼らによって建てられた建築が建ち並ぶことによって、結果として地域毎に特徴ある町並みが成立し、それら一連のものが伝統として定着されるに至ったと考えることも可能であろう。

謝辞: 調査を通じ、橋本市及び各住宅の所有者の方々等にお世話になった。記して謝意を表す。なお、本研究は平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C)17560577の助成による研究成果の一部である。

注

- 1) 同地区には近世から近代にかけての良質な町家、長屋が多数存在する。しかし、都市再開発計画に伴う区画整理事業によって、江戸時代以来の古い町並みが消失の危機にさらされており、市の委託事業として平成11(1999)年度より平成14(2002)年度まで町並み調査を実施した。調査結果は下記の報告書として刊行された。なお、継続して東家地区を中心とした調査を平成17(2005)年度以後、実施している。橋本の町と町家の研究会編:『橋本の町と町家 中心市街地伝統的町並み調査の記録1999-2002』、橋本市、2002.3
- 2) 「4軒7棟」は主要建物の新築数を表す。
- 3) 文書・図面類は表1にまとめた。史料12-a、12-bは個別に綴じられ、史料12の封筒に同封されていた。本論では封筒を数えず、2つの文書として扱

- う。なお、当該地区における近代の文書には、表1の他に旧村木家住宅主屋『本家上棟普請祝儀兼諸費控』（明治13・1880年）が確認されているが、同建物は近世までの建築形式を踏襲するもので、本論では対象外とした。
- 4) 親番号(①～④)は所有者別、枝番号(-1、-2)は工事別に付したもので、各工事は建築年代の古いものから順に並べた。以下、本文、表、写真等には同番号を用いる。
 - 5) 以下、建物名称に注記の無いものは新築工事とし、改築工事に関しては「改築」と注記を付す。なお、本論での「改築」は建物全体の建て替えではなく、一部の建て替え、改造を指すこととする。また、工事名称に付した「/」は別棟の建物を区分し、「-」は同一建物の用途を区分する。
 - 6) 以下、上棟の年号は文書の記述による。なお、木村家住宅主屋では幣串も確認され、文書と年号が整合した。また、上田家住宅中央棟にも幣串が確認されたが、年号の記述は無い。但し、当主の氏名は文書と整合する。
 - 7) 但し、平面図には現況と整合しないものや敷地全体を記さないものもある。これらの多くは設計図と考えられ、工事での設計変更の可能性も否定はできない。このため、文書の記述、前後の年代等、多角的視点からの総合的判断、資料批判を伴った上で参考にするよう留意した。
 - 8) 谷直樹、吉田純一、黒正歳、田辺泰、川上貢、渡辺保志、平井聖、大河直躬、内藤晶、渡辺勝彦、吉田高子氏等(順不同)による研究が多数ある。
 - 9) 日向進、市川定男、杉浦邦久:『若狭の大工と営業圏』、『若狭』第27号、pp.13-23、1981
西和夫:棟札に見る大工の居住地と工事場―横浜の近世社寺建築を中心とする検討、神奈川大学日本常民文化研究所論集3 歴史と民俗、pp.158-187、1988.1
 - 10) 渡辺洋子:『近世地方大工に見る職人仲間の性格と地域性』、私家版、1987.3第二章(pp.151-194)を「紀州町方大工仲間の研究―「大工株」の諸相―」と題し、田辺藩と新宮藩における「旦那場」(新宮藩では「旦那所」)等と呼ばれる一定の顧客層(新宮藩では顧客の居住する一定地域)を基本とした「株」規則を中心に、大工仲間の性格の相違について考察する。
 - 11) 建部恭宣:『京・近江・丹後大工の仕事―近世から近代へ―』、憐思文閣出版、2006.2
第一章(pp.14-40)を「京の大工「三上吉兵衛」の事績と近代化への対応」と題し、表題の大工が江戸時代末期から明治維新、さらにそれ以降、建築会の近代化にどう対応していったかについて明らかにする。三代目、四代目吉兵衛は社寺建築や住宅建築などの伝統的技術を継承するだけでなく、常に新しい技術や経営方式などを指向していたとされる。
 - 12) 日向進:『近世京都の町・町家・町家大工』、憐思文閣出版、1998.11第六章(pp.151-201)を「町家大工<近江屋吉兵衛>とその営業形態―江戸時代における町家大工の生産活動に関する一考察―」と題し、江戸時代の京都における大工の日常的な活動の諸相を具体的に論じる。第七章(pp.202-219)を「<近江屋吉兵衛>と祇園町南側の開発」と題し、近江屋吉兵衛の作成した図面類を素材として、明治初年に上地された建仁寺境内が、棟割長屋を始めとする小規模な借家を主体とした住宅地として供給されると共に、病院、学校、工場などの近代化を推進する拠点施設が経営されたことを明らかにする。
 - 13) 本論では大正時代から昭和時代初期の建築関係文書を「普請・建築文書」と呼称する。なお、「普請」と「建築」の語を併記した理由は下記資料を参照。梅嶋修、平山育男、御船達雄:近代末期の普請・建築文書に見る町家の建築総費用と祝儀の関係 -昭和9(1934)年建築、和歌山県橋本市上田家住宅中央棟の場合-、日本建築学会計画系論文集580、pp.181-187、2004.6
 - 14) 橋本における町家の編年の詳細は、注1)、pp.458-469を参照。
 - 15) 鏗鏘。同形式の壁面は奈良県五條市や和歌山県湯浅町でも報告されている。
 - 16) 大阪では明治42(1909)年の大阪府建築取締規則によって、町場の真壁が許されたが、この規制が橋本にも影響を及ぼしたと考えられる。
 - 17) 出桁造は、近世の町家で特に格式高い一部の町家に確認ができた。近代になってからはごく一般的に町家でも用いる傾向にある。
 - 18) 工事契約、落成に関する記録の無いものは、参考となる記録からの算出によって推測した。
 - 19) 敷地内にある上手土蔵は、主屋建築工事と同時に桁行を一間切断し、一階を離れ座敷に改築したことが古写真、文書類から読み取れた。木村家住宅の詳細は下記資料及び注1)、pp.336-341、522-524を参照。なお、同住宅は橋本川河川改修工事によって、平成14(2002)年3月に取り壊しを受け、現存しない。
 - 梅嶋、平山、御船、西澤哉子:近代橋本の建築文書に見る古材の使用-木村家住宅 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その29、2003年度大会(東海)学術講演梗概集F-2、日本建築学会、pp.131-132、2003.9
 - 20) 庭園工事に使用したと考えられる土代、竹代を支払が記録される。
 - 21) 池永一子家住宅、主屋と土蔵が国登録文化財。池永家住宅離れ座敷建築工事には納屋、塀の建築工事、旧主屋の改修工事を含むことが文書から読み取れるが、後の屋敷整備によって納屋と塀の一部は現存しない。池永家住宅の詳細は下記資料及び注1)、pp.256-265を参照。なお、注1)では「池永武文家住宅」の名称で掲載する。
 - 梅嶋、平山、御船、西澤:池永家文書にみる屋敷構えの変遷 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その35、2004年度大会(北海道)学術講演梗概集F-2、日本建築学会、pp.159-160、2004.8
 - 22) 『普請総費用控』(史料14)は工事の種類別に建築総費用をまとめており、金額を「厘」まで記録するため、工事がほぼ完了した時点で作成した文書と考えられる。
 - 23) 座敷は「納戸」と呼ばれる縁と床の間を備えた8帖の部屋で、角屋として主屋に接続される。座敷建築工事は主屋の増築と捉えることも可能だが、文書(史料29)では座敷を「新築」、主屋である店舗を「改築」と区分しており、本論はこれに従った。稲葉家住宅の詳細は注1)、pp.136-143を参照。同書では「旧いなばや呉服店」の名称で掲載する。なお、同住宅は橋本川河川改修工事によって、平成13(2001)年11月に取り壊しを受け、現存しない。
 - 24) 神社奉納の15日後(大正14・1925年5月30日)に、上棟式と同じ寿司屋に支払を行うため、この頃に落成式を行った可能性が考えられる。
 - 25) 稲葉家文書(史料30)では離れ座敷・納屋を「別座敷納家」と称する。これらは一棟の建物であり、一階の一部を納屋として使用している。
 - 26) 畳屋、建具屋への支払と同日に「料理人」「牛肉店」等の支払先も見られ、この頃に落成式を行った可能性が考えられる。
 - 27) 上田家住宅は旧大和街道沿いに3棟の建物を連続して所有しており、本論では便宜上「東棟」「中央棟」「西棟」と称する。開取調査によれば、土蔵の移築(曳家)も行ったとされるが、文書類にこの記述を確認することはできない。上田家住宅の詳細は注13)及び注1)、pp.154-161を参照。なお、注1)では「上田屋寝具店」の名称で掲載する。
 - 28) 「落成」とは屋根工事の完了、もしくは住居としての構えを整えた時点を指すものと考えられる。
 - 29) 上田家住宅中央棟は間口6間半あった旧主屋の西半分を取り壊して建築したものである。改修とは、残った旧主屋の東側を隠居の住まいとして整える工事であったと考えられた。詳細は注13)参照。
 - 30) 池永家文書(史料17、18)では主屋を「本宅」と称する。なお、貸家は区画整理事業に伴って、平成12(2000)年に取り壊しを受け、現存しない。
 - 31) 主に外部に面する建具に関する見積である「記」(池田福蔵)(史料20)には「昭和十二年」の年号も確認できるが、工程上、襖・障子を主とする領収証(「池永様 九月十一日支拂済」(三宅亀五郎商店)、昭和11・1936年、史料21)の1年後に見積られたとは考え難く、記述の誤り、もしくは一旦工事を納めた後の補修に関するものと判断した。
 - 32) 建築規模や工事範囲の他に、木村家住宅、上田家住宅、池永家住宅の主屋は大壁造であったため、土壁や漆喰の乾燥期間も建築工事期間の差に関わる。
 - 33) 『建築大辞典』(下出源七編、彰国社、p.1076、1974.10)によれば、「棟梁」は「(3)慶長以後は大工職人の親方、または建築工事を監督指導する大工」とある。本論では、大工の監督指導者は文書の記述に従って「棟梁」と記したが、左官の監督指導者は文書に肩書が確認できないため、便宜上「親方」と記した。
 - 34) 木村家文書『建築材料買入控』(史料1)に「上田岩吉 大工 橋本」とあり、地元の大工であることがわかる。
 - 35) 木村家文書『建築材料買入控』(史料1)、池永家文書『上棟祝儀及諸費控』(史料13)では、姓の記述は無く「常吉」とのみ記される。同名異人の可能性も考えられるが、後述のように池永家の工事を引き継ぐ点を考慮すれば上田岩吉と師弟関係にあった同一人物と考えるのが妥当と判断した。なお、上田家文書『材料買入日記』(史料32)によれば、平野常吉の出自は「川原町」とされる。川原町は橋本の小字であり、橋本地区の南西一帯を指す。
 - 36) 但し、池永家主屋では、「見積書」(史料24)が山本徳一と土塚清吉の併記で提出されており、共同作業であったことが窺える。
 - 37) 平野常吉に加え、荒内栄吉、水内竹松が参加している。
 - 38) 表4はこれら弟子、見習等の人員を含む。
 - 39) 近隣の職人であるか、あるいは棟梁・親方の弟子筋にあたる職人であるかといった関係は確認できなかった。
 - 40) 以下、本論では各建築工事の際、同一の棟梁・親方によって集められる職人達(弟子を含む)の集合体を1つの「集団」とし、職種によって「集団」の前に「大工」「左官」を付すこととする。また、「大工集団」「左官集団」などを総じて「職人集団」と称することとする。
 - 41) このような大工の活動形態は注12)、p.184で既に指摘されている。
 - 42) 注10)によれば、近世の紀州において大工達は「旦那場」等と呼ばれる一定の顧客層を取り決め、互いに侵犯することの無いよう規則を立てていたとされる。
 - 43) 池永家文書「本宅普請ノ大工日雇請負契約」(史料17)、上田家文書『材料買入日記』(史料32)等で確認できる。
 - 44) 木村家文書『日工控』(史料2)では、施主が職人の人工数を控えているが、金銭の支払いは棟梁・親方に行っている。
 - 45) 橋本・古田地区において旧大和街道沿いに面した建物は76軒を確認した(1999年度末時点)。但し、昭和36(1961)年までに国道24号線(旧大和街道)の拡張工事が行われており、道路北側の町家はそれ以前の様相が全く把握できない状態のため、総数に含んでいない。
 - 46) これを更に本論3項で前述した大壁造、定規筋、出桁造、袖壁等の意匠を有する大正時代から昭和時代初期の格式高い主屋に限定すれば、外観上は上田家住宅中央棟、大谷薬局主屋、小南食料品店主屋(現存せず)、平林酒店主屋、池永一子家住宅主屋の5棟に限定される(各建物の詳細は注1)参照)。大正時代から昭和時代初期の建築工事の総数が近世以来の町並みを一新するまでに至らなかったことは想像しやすい。
 - 47) 注10)によれば、紀州田辺町方大工の数は近世を通じて殆ど変動が無く一定で、旦那場の株規則が員数制限の効力を発揮していたとされる。建築の需要と大工の数には何らかの関係性が窺える。また、注12)、pp.185-188、199によれば、大工近江屋吉兵衛の仕事の中心は改修工事や造作・指物類で、大火等特に大きな災害が無い穏やかな時期の新築普請の受注数は1年間に1〜2棟であったとされ、これは平常時の建築の需要や配下の大工の動員体制等によるものと指摘する。
 - 48) この他、明治時代前期の事例として、村木家文書『本家上棟普請祝儀兼諸費控』(明治13・1880年、注3参照)に「大政」を棟梁とする数名の大工名が確認でき、みそや別館主屋(明治17・1884年、国登録文化財)の棟札には「棟梁 西京 政田佐兵衛 西京 政田浅次郎 橋本 木澤新兵衛」と記される。後者は京都から招聘した大工の主導による建築であるものの、棟梁名は併記しており、棟梁を担う技術を有した地元大工の氏名が明らかとなる。第二次世界大戦後の事例として、稲葉家住宅(稲作金物店)主屋(昭和32・1957年)の幣串に「施工者 太田慶市」と記される。開取調査によれば、大谷薬局主屋(大正15・1926年[幣串]、注1)、pp.162-167参照)の大工は古佐田の太田(名前不詳)、上田家住宅東棟(昭和39・1964年[開取]、注1)、pp.154-161参照)の大工は古佐田の太田慶市とされ、同一人物あるいは血縁関係の可能性が考えられる。
 - 49) 橋本の街道沿いの町家においては、敷地内の建物は主屋の他に土蔵、離れ座敷等を保有する家が多く、一つの敷地内には主屋を含め平均3〜4棟が立地する。なお、保有建物数は格式や敷地形状によって前後し、旧街道を含めた表通りを外れた地域には長屋が多く、付属屋を持たない家が多い。

(2006年7月10日原稿受理、2007年1月31日採用決定)